

プロジェクト名：日本とイタリアにおけるプロサッカー・チームの支持と地域的意義に関する比較研究

代表者：山本 充（教養学部・教授）

分担者：梶島邦江（教養学部・教授）

1 研究の目的

地域に根ざした活動を行い、地域に受け入れられているといわれるプロサッカーチームが実際に本拠地とする地域とどのような関係を有しているのか、その歴史も文化も異なる日本とイタリアを比較しつつ明らかにすることを目的とする。

本年度は、さいたま市の浦和レッズを対象として、年齢、性別、職業など、どのような住民層に支持されているのか、観戦者の居住地には、どのような地域的広がりや偏りがあるのか、観戦後に、観戦者はどのような行動を行い、どのような効果を地域に与えるのか、観戦者調査を実施し、把握する。

加えて、シンポジウムの開催を通して、これまで行ってきた浦和レッズと大宮アルディージャの調査結果と比較し変化をみるとともに、日本とイタリアのケースの比較を行う。

2 研究の経過

・イタリアにおける観戦者調査の予備調査

2013年10月にイタリア・トリノ大学およびTorino Football Clubを訪れ、トリノにおける観戦者調査実施の打合せを行うと共に、Torino Football ClubのAlberto BARILEに、シンポジウムへの参加を打診した。

・浦和レッズ・観戦者調査の実施

2013年3月9日(土)、埼玉スタジアムにおける浦和レッズ対名古屋グランパス戦を対象とした。今回の調査はレッズファン900名に依頼し、期限内(3月末)に郵送回収できたのは427票であり、回収率は47.4%であった。これまで実施してきたレッズの観戦者調査、2007年：40.8% (4000部配布 1632票回収)、2008年34.0% (3000部配布 1021票回収)、2009年46.0% (1200部配布 552票回収)と比べても、十分に高い回収率である。ちなみに当日の入場者数は52,293人であり、ホームファン・サポーターの1割弱のサンプルを得たことになる。一方、アウェイの名古屋グランパスファンに対しては、調査票を手渡し配布、その場で回収するという方法を採用。119名に対して配布し、全員から回答を得た。

・シンポジウムの開催

2013年3月22日(金)18時～20時、With You さいたまにおいて、「サッカーと地域社会」をテーマとしてシンポジウムを開催した。パネリストは、Alberto BARILE (Torino Football Club S.p.A. マーケティング・広報責任者)、白戸秀和 (浦和レッドダイヤモンドズ社長補佐)、久保田剛 (大宮アルディージャ事業本部長)、山本 充 (埼玉大学教養学部教授)、司会は、梶島邦江 (埼玉大学教養学部教授)、菊原伸郎 (埼玉大学教育学部准教授) であり、93名の参加者を見た。

3 研究の成果

浦和レッズの観戦者調査におけるホーム側の回答者 427 名のうち、男性が 58%、女性が 42%とやや男性が多い。年齢は 40～49 歳が最も多く 28.3%、ついで 30～39 歳が 23.7%、さらに 50～59 歳が 20.8%と、30 歳～59 歳で全体の 72.8%を占める。従来の調査でみられたファン・サポーターの中高年齢化は、今年も明瞭である。これを男女別にみると、男性はほぼ全体傾向に準じるが、女性は、30～39 歳にピークがあり (24.7%)、20～29 歳も男性よりも比率は高い。総じて女性は男性よりもやや若い層が多いといえる。その反面、60～69 歳の高齢層でも女性の割合が 14.0%と高く、男性のほぼ倍の比率を示す。

職業に関しては、最も多くが専門技術職、事務職で共に 17.6%、これに主婦、管理職、販売・サービス業が 14.1%、13.6%、12.5%と続く。この 4 業種で全体の 3/4 を占めており、ホワイトカラー層それも管理的立場にある人によって、浦和レッズは支えられていることが分かる。この職業傾向を裏付けるのが、最終学歴である。大学・短大卒業者が半数以上 (53.3%) おり、大学院卒業も 3.3%を数える

これを男女別にみると、男性は大学卒業が 57.5%と多く、女性は大学卒も 48.0%いると同時に、高卒も 32.7%と多い。男性の学歴が女性より高いことは、全国傾向に準じている。また年齢別に最終学歴をみると、60 歳以上では高卒の割合が高く、年齢が下がるに従って大学卒業の割合が増えており、これも全国的な傾向に準じていることが分かる。

地域別にみると、埼玉県が 4 分の 3 を占めており、埼玉県民によって浦和レッズが支持されていることがわかる。その中でもさいたま市が全体の 3 割、旧浦和市が 2 割であり、さいたま市内の中で旧浦和市の比率が約 7 割であることから、その中核をなすのが旧浦和市民であることも明らかである。

サッカーが好きになって変わったこととしては、最も多くは新しい友人・知人が増えた、で半数。ついで、家族の会話が弾む、ストレス発散が 45%を占める。

サッカーを観戦することで変化したこととして、家族との行動、友人との会話が多くなり、生活の張り、街への誇りも強まったとする回答が 20%を超え、サッカーが生活のさまざまな面に影響を及ぼしていることがわかる。男女別では、女性において、家族との会話、家族との行動が増えた、が多く、男性は街への誇り、友人・知人との会話が増えたことをより強く意識している。女性は家族との関係上、より強くサッカー効果を意識しているのに対して、男性は地域・街とのつながり上での変化をより強く認識することがわかる。

観戦に伴う派生行動の可能性を知るために、さいたま市周辺に立地する施設や場所の利用をたずねた。レッドボルテージ、ディズニールゾート、スーパーアリーナ、氷川神社がいずれも 8 割前後の利用率を示すのに対して、盆栽村が 1 割弱、盆栽博物館は 4.7%と、盆栽関係施設の利用率はごく低い。男女別にみると、芸術劇場の利用は女性において明らかに高い。また年齢別には、総じて年齢が上がるに従っていずれの施設の利用も増えてくる。

シンポジウムにおいては、Torino Football Club の Alberto BARILE 氏が、トリノ F.C.を例に、イタリアにおけるプロサッカーチームの地域との関係を、浦和レッズの白戸秀和氏と、大宮アルディージャの久保田剛氏には、それぞれにチームの地域との関わりを報告していただいた。加えて、山本充により、観戦者調査からみる、サッカーチームと地域との関係を報告し、とりわけ地域との関係における日本とイタリアの差異を巡り、来場者と質疑応答を行った。より詳細な分析のためには、イタリア、トリノ F.C.における観戦者調査が必要である。